

Title	フレスコバルディの鍵盤トッカータ : 作曲された即興演奏というパラドックス
Author(s)	大岩, みどり
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57871
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

【36】

氏名	大岩みどり
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第23490号
学位授与年月日	平成22年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化表現論専攻
学位論文名	フレスコバルディの鍵盤トッカーター作曲された即興演奏というパ ラドックス
論文審査委員	(主査) 教授 根岸 一美 (副査) 教授 藤村 昌昭 准教授 伊東 信宏

論文内容の要旨

本論文はバロック時代の初期に活躍したイタリアの作曲家ジローラモ・フレスコバルディ(Girolamo Frescobaldi, 1583-1643)の《トッカータ集第1巻》(1615)を取り上げ、彼のトッカータ作品の独自性を探ることを目指した研究であり、1～4章および終章から構成されている(A4判80頁)。

第1章「作曲された即興演奏としてのトッカータ」では、最初に17世紀初頭における音楽実践の在り方に注目し、紙の上に作曲された音楽と、実際に演奏される音楽とが、互いに関連し合うものの、完全には重なり合わない二つの音楽の形であったことを、諸事例の考察を通じて確認した上で、「フレスコバルディのトッカータは作曲された即興演奏である」というテーゼを提示している。

第2章「《トッカータ集第1巻》の献呈辞と序文に見る、作品への意識と「演奏スタイル」」では、フレスコバルディが自身の《トッカータ集第1巻》の序文に記した「注意事項」(avvertimento)

を取り上げ、楽譜として記された彼の作品は、彼の即興演奏の「スタイル」が作品として具現化したものであるとの解釈を示している。またこの章では、当時のマドリガーレなどの「歌唱スタイル」(la maniera di cantare)が、フレスコバルディの「演奏スタイル」(la maniera di sonare)に影響を与えていたことを指摘するとともに、このことは先行研究において見落とされていた点であるとも述べている。

第3章「旋法理論とフレスコバルディの鍵盤作品の旋法構成」では、最初に、第4章で行う分析の準備として、16世紀後半から17世紀前半までの音楽理論の要点を述べている。特に、16世紀末にはすでに機能と声的な音感覚がある程度成立していたことを指摘しているが、他方、フレスコバルディの鍵盤作品全般を旋法という観点からも概観し、その上で、本研究の対象である《トッカータ集第1巻》は、混合旋法などの、旋法の可能性を拡大する試みを見せている《トッカータ集第2巻》(1627)に比べると、基本的には旋法性の枠内に留まっているものと位置づけている。

第4章「《トッカータ集第1巻》に見る affetti cantabile と diversità di passi」では、詳細な楽曲分析により、彼のトッカータが、まさしく「あたかも即興演奏であるかのように作曲された作品」であったことを裏付ける試みを行っている。彼のトッカータにおける「表情豊かな音型と多彩なパッセージ」(《第1巻》序文)と流動的に変化する和声は、「瞬間的なインスピレーション以外のどのような規則にも従わない」(Apel 1973)かのような印象を与えるが、実は、巧みに構成されたスキームによって分節化されたものである、と捉え、そして、このスキームは、機能と声的なカデンツと、フィギュレーションの相互作用により成立しており、その具体的な様相を解明することができたことが、本研究の最大の成果であったと述べている。

終章「フレスコバルディのトッカータにおけるパラドックス」では、先行研究において行われた、「統一性」や「一貫性」を見出そうとする分析が、結果的にフレスコバルディのトッカータを後続のフローベルガーやドイツの作曲家たちによる、形式的に「整った」トッカータに至る「過渡期の作品」と捉えるものとなっていることを指摘した上で、「フレスコバルディのトッカータにおいては、多彩で流動する「表層」が即ち「本質」なのであり、「逆説的であるが、彼のトッカータは分析というアプローチを拒むものである」ということが、分析から得られた結論である」と記している。

論文審査の結果の要旨

フレスコバルディはバッハ以前の鍵盤音楽作曲家として最も著名な存在ともいえるが、その作品の様式や構成原理を把握することがきわめて難しいことも広く知られている。本研究は、演奏家としても豊かな経験を有する申請者が、長年にわたって感じ取ってきたこれらの問題に一定の解答を見いだそうとする試みであり、先行研究を十分に批判的に受けとめた上で、楽曲分析を丹念に推し進めており、またバロック時代初期における音楽様式の変化の状況を、一作曲家の作品を核としながら、抉り出すことにも取り組んだ労作となっている。本論文に関する口頭試問は、2010年1月28日(木)、およそ1時間30分にわたって実施した。そこでは、1) 論文におけるイタリア語の訳についてはやはり原文を示し、検証可能にしておくことが望ましい、2) イタリア語の重要な用語の日本語訳や片仮名表記についても改善の余地が多分にある、3) キーワー

ドについては「用語解説」のような部分を設けて、まとめて説明することが望ましい、といった指摘が行われ、さらに4)「作曲された即興演奏」という理解が最初からキャッチフレーズのようになっているが「即興演奏」の概念そのものについてもっと慎重な取り組みが求められる、5)「全体性」「一貫性」「連続性」「形式性」といったタームについても、意味上の整理が必要ではないか、などの指摘も行われた。これらに対し、申請者からの回答は的確に行われたが、論文の副題として掲げられた「作曲された即興演奏というパラドックス」については、しかし、初めにテーゼありきの感を否めず、やはりこの作曲家の同じジャンルの作品に総合的に取り組むことにより、確証に至ることが望まれよう。しかしながら、分量的には小規模であるものの、分析上の所見は詳細にして的確な理解を示すものとなっており、本論文が今後の初期バロック音楽研究に向けて一つの問題提起となった意味は決して小さくない。以上の成果により、本論文を博士(文学)の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。